神戸新聞
2018年（平成30年）
2月4日
日曜日

見る 思う

スポーツでまちづくり再考を

流通科学大准教授
山口 志郎

「スポーツが地域を元気にする」―近頃そんな言葉をよく耳にする。昨年6月11日にスポーツ庁は「アウトドアスポーツ推進宣言」を行った。狙いは、地方ならではの自然資源を活用した地域活性化、交流人口の拡大によるスポーツツーリズムの推進である。

同年、急流を下って競うラフティング世界選手権が吉野川中流域の徳島県三好市で開催され、私は外国人参加者の調査を行うため現地を訪れた。驚かされたのは、自然資源を有効活用した大会運営である。今でこそ年間約3万5千人が吉野川を訪れるラフティングの人気スポットとなったが、一昔前まで地元住民は安全の問題から、同川へ近づかなかった背景がある。同川は豊富な水量と激流ポイントが点在し、上流の大歩危（おおぼけ）・小歩危（こぼけ）の渓谷は、国の天然記念物に指定されるなど地質学的評価も高い。大会はこの自然資源を活用し、産官学民が連携して運営している点に感銘を受けた。特に地元住民の外国人参加者に対するおもてなしは、スポーツツーリズムによるインバウンド促進の新たな可能性を示す事例となっている。

ここで私が生まれ育った神戸について考えてみたい。神戸は、緑豊かな六甲山と穏やかな瀬戸内海に抱かれた美しい街並みが概観でき、全国まれにみる山と海に囲まれた港町である。神戸でサッカー、ゴルフ、マラソン、ラグビー、ボウリングなどさまざまな近代スポーツが発祥したと言われ、スポーツとの親和性は高い。1985年に「国際スポーツ都市宣言」、97年に「神戸アスリートタウン構想」を掲げ、スポーツを通じたまちづくりを進めている。85年ユニバーシアード神戸大会、2002年FIFAワールドカップを開催した。19年にはラグビーワールドカップ、21年にはワールドマスターズゲームズ関西の開催を控える。

一方、11年から行われている神戸マラソンを除けば、神戸市外や海外からの参加者が定期的に参加できるイベントやコンテンツは少なく、神戸の自然資源を有効活用しているとは言いがたい。

神戸商工会議所は昨年、19年からの「ゴールデン・スポーツイヤーズ」を見据え、スポーツ産業の振興へ産学で知恵を出す「神戸スポーツ産業懇話会」を設立した。18年4月より、懇話会では「スポーツツーリズム・ワーキンググループ」を立ち上げ、神戸における自然資源を活用した新たなスポーツイベントの提案やインバウンドツーリスト向けの新たなビジネスモデルを開発する予定である。

吉野川は、地元住民にとってあまり良い印象ではなかった自然資源を、ラフティングの聖地に生まれ変わらせた。こうした「マイナスをプラスに変えるまちづくり」が今後の地域振興のキーワードになるかもしれない。神戸においても逆転の発想で、スポーツによるまちづくり再考を期待したい。

やまぐち・しろう　1985年神戸市生まれ、同市在住。順天堂大大学院修了。流通科学大准教授、和歌山大国際観光学研究センター客員研究員、神戸スポーツ産業懇話会世話人。専門分野は、スポーツマネジメント。